書評

川瀬一馬氏著 古辞書の研究

山田忠雄

一 まへがき

川瀬氏にこの著あらんとするよしをもれきいてからすでに十有余年、その間たえずひそかな期待を本書によせてきたが、今日大冊をめのまへにして、書誌的渉猟の広汎と自信ある考証・断定ぶりには真に一驚せざるをえない。

川瀬氏三十年、不断の研鑽に対し、わたくしの調査はまだ二十年にもみたず、しかも断続つねならず、主として従事したのは戦後の十年である。されば、資料蒐集の点においても鑑識眼においてもいちじるしくおとるわたくしが本書に対して批評しうるのは、全体の組織および編述態度とわたくしもみることができた共通資料に関する部分についてのみにかぎられる。

書評は元来読者の読書・購書上の案内のためにするものであらうが、わたくしは、厳正なる批評こそ学運の進展に寄与するとともに真の意味の啓蒙にも役だつものであるといふ見解のもとに以下ふでをとる。妄評著者を遇することが酷にすぎるとうけとられるむきもあるいはあらうかとおもふが、それらは一に評者自身をいましめるゆゑんにほかならぬものと御諒解ありたい。

二 本書の本領

表題「古辞書の研究」には、元来、古辞書の個別的研究と辞書史の研究と二義がふくまれるものとおもふが、本書の内容は前者にあつく、後者にうすい。また、前者においても内容研究といふよりは書誌的記述の方が断然重点をしめる。著者のおもなる興味は、いかに未知の資料を豊富に紹介するかにかかるものと観察される。そしてそのかぎりにおいて前人未到の処女地を開拓した功は没すべからざるものがある。国会図書館において本書を020.11（「書誌学の総記」の意）と登録したことは、日本十進分類法の範囲内ではけだし正当な評価といふべきであらう。

本書は、みぎの根本性格に即応し、長短をあはせもつ。従来所在が報告せられなかったかずかずの書籍についてあらたにヴェェルがひらかれたこと、また、いままで伝来がくはしくとかれなかったり系統が十分にはわからなかった諸書のあひだの系譜についての新見が披瀝されたことは、われわれに恩恵と指針と勇気とをあたへる。しかしながら、一方において氏一流の直観的方法はあまりにも大胆にすぎ、ときにおほきな過失をかすもとゐとなることがないでもない。たとへば八二二ページ慶長十五年刊小山版節用集を覆刻易林本（橋本博士のいはゆる別版易林本）の覆刻と断じた

ごときは、粗雑・放漫に すぎる。その、まったく 事実に あたらない ことについては すでに 亀井孝氏が 昭和二十四年十月に論じられた ところ、いまさら 喋喋するまでも あるまい(国語と国文学 第三百六号「小山版節用集の系統と価値」)。また おなじく 節用集中、赤堀又次郎氏の「国語学書目解題」に いはゆる 文明六年本は、元来 明応三年本と よばるべき ものを、延徳二年本と 呼称し、あまつさへ 同年を 書写の 識語と 解する ことの ごときは はなはだしき 誤認と いはざるを えない。このことについては すでに わたくしが 昭和二十六年二月に 論じた とほりである(国語学 第五輯「橋本博士以後の 節用集研究」参照。なほ、つぎの ページに かかげた 図版は みぎの 事実を 証明する)。増補の きはめて おほい 同本によって 節用集の 原本形態を 推定、これによって 原本の 成立を 特筆大書した 部分の ごときは 砂上の 楼閣として 瓦解しさるべき 運命に ある。

わたくしは みぎの 理由により、従来 こころみられた 書誌的方法一般に 対し つねに 一種の おそれと うたがひとを もたざるを えない。もっとも この 点に 関しては 川瀬氏も「古人の書誌的記載は信じ難いから」(一例、七五八ページ)といふことを のべてをられるのでは あるが。

三 本書の 性格

本書は B五判 九五七ページの 厚冊、その 編次は 叙説(計、一〇ページ)の ほかに おほきく 篇を わける こと 三、第一篇 鎌倉時代以前に於ける 辞書(計、三六二ページ)、第二篇 鎌倉時代・南北朝に於ける 辞書(計、一九二ページ)、第三篇 室町時代に於ける 辞書(三七〇ページ)。各篇の 第一章 もしくは 第二章までを 当代辞書の 概観に あて、史的記述を こころみ(合計九四ページ)、他章は 各説にあて、成立年代順に 一書ごとに 節を まうける(平安時代 三十一節、鎌倉時代 十九節、南北朝時代 五節、室町時代 三十節)。みぎの ごとく 室町時代 までに 成立した 八十五の 古辞書が 一書に まとめ論ぜられるのは これが 始めてであり、たしかに 一偉観を 呈する。ただし、そのうち 計 三十種までは、従来 国語学者が あまり とりあげなかった 百科事彙や 類書 もしくは 教科書的性格の 濃厚な ものである。往来ものや 巻音義を 非辞書として 原則的に あつかはなかった 著者が なにゆゑ 類書等を 古辞書の なかに ふくめたかについては おほくの 説明が ほどこされてゐない(わたくしは しかるべき 理由が 開陳されさへすれば、類書等を 辞書の 一類と みとめることも 成立するとは おもふ)。その 意味では 本書には 方法論的反省が 比較的 とぼしい ものと いはねば ならぬ。

各本の 伝来事情や 伝本の 所在等について 精細に 記述して ある ことは、おそらく 他の 追随を ゆるさぬ ところ、まさに 独擅場と いふべきであらう。ただし、その 記述態度を みるに、十年前の 旧稿を もとに したと 称する 本書は、それ以後に 発表された かずかずの すぐれた 業績に 言及しなかった ことは あるいは 当然としても(ただし、自己の ものは 勿論、最近の ものまで 掲載する)、破邪顕正のために 他説の 非なる ときには 躊躇せず 指摘する 一方において、好文献が あっても 自己の 説に 同一なら ばあひは おほく 省筆に したがふ といふ 編述態度を もつやうに うかがはれる。これは みやうによっては きはめて 偏頗な、また 非学術的態度と いはざるを えない。

上野図書館蔵〔広本〕節用集 た部人名門（赤堀氏の いはゆる 文明六年本）
四行め第二行から 五行め第一行の 延徳二年・明応三年云云と あるに 注意

本書における論断のうちもっとも明快なのは季綱切韻、原形本色葉字類抄、十巻本伊呂波字類抄流布本の祖本等の発見ならびに三巻本字鏡抄の紹介等であるが、これらの新見に関する資料の大部分は著者以外にみたことがないし、くちゑの図版にもこのやうな要所をおさへるものにかぎっては掲出されてゐないといふことも偶然にしてはあまりにも念がいりすぎてゐるやうにおもふのは評者ひとりのひがめにすぎないであらうか。

本書評はつぎの要領にしたがって執筆した。

一、各説中もっとも、重点のおかれた、下学集（第四節、計八九ぺ）、倭玉篇（第七節、計七七ぺ）、節用集（第九節、計五八ぺ）〔計二二四ぺ、実に全ぺェジの二四%強をしめる〕の三書についてとくところを瞥見し、ついで他の各節中気のついた点のみをかいつまんでのべることにする。

二、本書の随所にみられる誤植の類については、学術書としてはおどろくべく豊富であると、概括的にしめすにとどめ、具体的には一切とりあげぬこととする。ただし、引例の正確はこの種の文献における生命とかんがへ、次下の章において重点的にふれた。

三、紙幅に制限があるので、公正をかくかとはおもふが、複製本についてはなるべくふれぬ方針にしたがった。

四　第九節　節用集の項について

総じていへば、この節においてとるべきところは竜門文庫蔵の三本ならびに高野山本についての紹介およびいはゆる文明六年本の伝来事情、また天正十八年についての新見等であらう。それ以外の部分、たとへば諸本の系統については橋本博士のものを踏襲もしくは誤解した程度にとどまり一向進展はみられない。「古写本伝本の新たに管見に入ったもの」として十四本列挙したにかかはらず、「新たに発見された古写伝本」においては前記四本ならびに辞林枝葉の五本を記述するにとどまる。そのうちでも、辞林枝葉の紹介はかつておほやけにされた岡田希雄氏のものの方がはるかにくはしくかつ本質的である（歴史と国文学昭和十六年十二月号）。

六（追記）延徳二年本節用集についての根本的誤解はすでに指摘したとほり、所論はまったく意味をなさないのであるが、張数を五百八十四葉とかぞへあやまったりする形式的な誤認のほかに（はこがきの題もただしくは雑字類書引用きはめて杜撰である。一斑をあげるならば次下のごとくである。

〔例示には文語文を使用す〕

七八七ぺ　六行め伊勢の下字の左旁にはイキヲイのほかにサマもあり。注文二行め、鈴鹿の直下の府は小書府（コウ）とあるがただし。奄芸の附訓はアナキ、七八八ぺ犬追物の下字は者（モノ）に訂（シヤ）せらるべし。注文、二行め「且」はなし、而已は而已也、四行め昭侍者は心昭侍者と訂すべし。

七九一ぺ　七行め、附録の七十二候、二十四節はともに二葉なり。十一行め国分寺の注文二行め天平廿八年の八は衍（ちなみに、天平は廿一年にて改元）、次行六解堂は六角堂と訂すべし。

七九二ぺ　阿潘の注文一行め、六百五十年は六百五十五年、

聖徳太子の　注文中　二行め　二月は　十二月、手は　右手　と　訂すべし。

七九六ペ　二行め、伊波世（イハセ）の　したに　野を　脱す。泉松の　下字は　杣（ソマ）、六行め　去来山は　去来見山、九行め　乾の　注文　第一字　別は　則、十行め　石の　注文　第一字　石は　一と　訂すべし。

七九八ペ　十三行め、電の　異名　天矢は　次ベェジ　最終行には　天災と　あり、前者　可ならむ。

七九九ペ〔家屋門〕、家の　直下の　居は　屋、囲炉裡の　附訓は　イルリと　訂すべし。〔時節門〕古と　今とは　別の　語、〔草木門〕維蘇（イヌエ）は　一語なり。

八〇〇ペ〔数量門〕二の　異名　示不少は　示不小ならでは　意かなひがたし。一段の　注文中　俗作反の　つぎに　句点を　要す。辞は　辞字と　訂すべし。〔態芸門〕威獰（タケヲ）の　附訓は　ニヤウ、毒振レ威は　威毒　振レ威と　訂すべし。伝音絶音問は　伝音　絶音問と　訂すべし。注記に　十四葉と　いふは、実は　一葉を　へだつるのみなり。悦悦は　怡悦、注文　書状は　書、未審の　右旁の　訓は　イブカッシ、鼈然の　左旁の　訓　ウゼンは、ヘウゼン、あとより　三行めの　念は　愈、終行　澌の　右旁の　訓　イカニは　イカルと　訂すべし。

八〇二ペ　十一行め、起居動止の　注文、挙止の　附訓は　タチフルマイ、存は　在と　訂すべし。

八〇三ペ　三行め、校割の　注文　臓物は　蠢物、六行め　机の　附訓は　ツキエ、七行め　壁書の　下字の　附訓は　カクと　訂すべし。八行め　栄西栄西の　注文　二行め　師曰の　つぎに　晶を　脱す。

八一〇ペ、饅頭屋本の　再版本について「第七葉までは（後記　石田本を　加味すれば「四葉までは」と　訂さる）知ることが出来ないが」とあるも、早大図書館本に　つけば　巻首は　みるをうべし。

五　第七節　倭玉篇の　項について

川瀬氏の　博捜は　よく　写本　二十八本に　および、その　諸本分類のごときも　やや　形式的に　ながれ、繁に　すぎた　きらひは　あるが、一往　成功した　ものと　いへよう。ただ　新編訓点略玉篇には　わたくしが　国語学辞典に　といたごとき　本も　存する　ことは　記憶せらるべきである。七〇九ペ　あとから　三行め　小玉篇の　附注音訓が　落葉集と　おなじく　ひらがなを　もちゐてゐる　ことについて「倭玉篇中他に　殆ど類例を見ない一特色であらう」としるしてあるが、すくない　ことは　事実であっても　絶無では　ない。いづれも　くだれる　もののみであるが、わたくしは　いままでに　三本　みた。一は　九行四段　無刊記の　よこ本（亀田氏目録の　三十一に　あたるか、岡井慎吾博士の「玉篇の研究」中　倭玉篇(41)　草躰本行真躰左行本に　くはしい　解題が　ある）、二は　倭玉真草字引大成（同目録三十二、明治六年刊の　四十二は　その　後刻本、岡井博士の　前掲書(69)に　くはしい　記述が　ある）、三は　宇喜多小十郎の　増補扁冠字引大全（よこ本、明治六年十二月刊）。

六八七ペ　五―一三行めに　かけての　一字さげの　注記は　他を　せめる　ことは　なはだ　急、また、いはでもの　感が　せられる。おなじ　論法を　もって　かへって　みづからも　せめられる　ところ　本書に　はたして　皆無と　いへるか　どうか。

次下に　共通の　資料(ロ)京大本について　指摘しよう。〔ふたたび文語文に　もどる〕

六九三ペ　あとから　三行め、たての　寸法は　九寸二分、禾の付文　杏は　香、末は　米に　訂せらるべし。

六九四ペ　五行め、海雲の　左旁には　訓　ウミ　なかりしもののごとし。

日之部第三以下　十五部の　すゑに　予は　本文と　一筆の　語を　さらに　おほく　つけくはふべき　必要を　感ず。この　本は　かきいれきはめて　おほく、他部においては　川瀬氏と　予と　意見　一致するも、みぎに　のべたる　範囲において　大量に　意見を　ことにす。されど　紙幅　なきをもって　一一に　あげつらはず。

水之部篇第八　濫の　第二訓は　ミタリカハシ　と　訂すべし。

六九六ペ、竹之部第十五付箋　箚と　筑との　あひだに　籠カタミを　くはふべし。なほ、筑の　附訓　ヒカリは　疑問。この　字は　六行の　冒頭に　あるが、あるいは　前行頭の　筑（ママ）ツクの　異体字として　傍書せられたるには　あらざるか。しかうして　そを　注記する（ママ）コウモカクの　した　三字を　ヒカリと　川瀬氏が　誤認したるものかと　推せられる。犬之部第二十　獪の　附訓は　タケイヌかタフレイヌなるべし。虫之部第廿三　蛟の　訓　ミロチは　もとのままなるも、ミヅチ・ヲロチの　コンタミネエションか。

六九七ペ　口之部第廿九　嗄と　あるみだしは　喉と　訂すべし。手之部第卅一の　すゑの　三語は　後記なれば　けづり、かはりに　探サクル　撫子ナテシコを　くはふべし。足之部第卅二　蹇の　訓（缺）とあるは、アシナへ（イナヘク）と　判読せらる。尸之部第卅四届の　訓（缺）は　クラシにはあらざるか。疒之部第卅五　疹シンは　疹シン瘡モと　訂すべし。力之部第卅六の　勒は　後加なれば　のぞき、膚イケトルを　くはふべし。心之部第卅七の　慤（アク）は　慥（アタ）ウラムと　訂すべし。カ（欠）

六九八ペ　一行め　「内外之造作も」は　注文なるを、本文に　竄入せるは　いとわるし。注文「四方六間も」は「四方之間も」なり。二行め「銀六拾七貫四百目ハ」の　ハを　脱す。三行め「銀弐貫三百目」の　三は　衍、前行の　同字に、牽引せられたり。五行め「先規より如有成候」の「成」は「来」を　ただしと　するか。

六　第四節　下学集の　項について

五七八ペ、辞書において　神祇の　目を　たてる　ことは　下学集が　濫觴では　ない。すでに　頓要集に　先例　あるものを。

五八六ペ、下学集と　節用集の　古写本の　現存数について　前者は　後者を　凌駕すると　いはれたが、わたくしの　みる　ところでは　ほとんど　伯仲、むしろ　前者は　後者に　一籌を　輸するやうに　おもはれる。

五八七ペ　以下において　従来　ほとんど　おこなはれなかった　下学集の　類（クラスフィケエション）化に　成功したが、三類間の　径庭は　あまりにも　僅少である。たとへば、川瀬氏の　とりあげなかった　本のうち、御巫本は　内部的特徴から　第一類本二　室町中期写二冊本（川瀬氏蔵）と　酷似し、亀田本も　第三類に　大体　はいるやうであるが、岡田真氏旧蔵の　永正鈔本　二種のごときは　川瀬氏の　提示した　分類基準では　判別不能である。また、増補の　おほい　正宗本等については　第二類本　中に　さらに　有効な　細分が　必要かとおもふ。以下　わたくしの　しらべえた　本について　若干　粗評をこころみる。（また　文語文に　かへる）

まづ　第一類本から。五八九ペ　一　東京文理科大学蔵室町中期写本の　体裁「毎半葉六行」と　あるは、前半の　小部分のみ、大

部分は 八行なり。鴨壺敲の 三字めは 敖と 訂すべし。五九一ペ 一行め、蒼旻と 宇宙との あひだに 乾坤を 脱す。

二 室町中期写二冊本（川瀬氏蔵）において 下学集の 原本を 二冊本と 想定せるは 可、補注にて 二本のみと 限定せるは 不可。五九五ペ 一行め、神璽の 分注 玉者の 者は 御巫本には なし。三行め 草薙剣の 注文 照田神殿の 照は 熱なるべし。

四 京都大学蔵本（室町末期写）、六〇〇ペ 三行め「第五官位門は『始爵』の次に改行をして」とあるは 事実に 即せず。第六人名門の すゑに 増補 なき むねを のべたるも、増補は 現に あり。

六 天文十年東誉写本（東北大学狩野文庫蔵）一冊、六〇四ペ 一行め、溶は 溶と 訂すべし。跗の訓 ヲソムサマのサは 衍、三行め 士分は 十一分、追氷の 訓は セメシラムと 訂すべし。最終行「第八気形門の末は『螢』で終ってない増補なく」の「ない」は 衍、六〇五ペ 一行め、第十態芸門の すゑ 増補 なき もののごとく のべたるも、「鰯」の 一語 追加せらる。したがって 六〇六ペ 一〇行の 記事は 訂正を 要す。二行め 銀糸三柳の注は サウメンイ名、三行め 船舟艇舶般の 注文は 五字義同、ふでの 異名中 最後は 中書君に それぞれ 訂すべし。

一〇 松井文庫本（室町末期写上巻）六一二ペ 最終行は 没論理、六一三ペ 五行め 第二の 門名は 時節門に 訂すべし。第六人名門の すゑには さらに 慶喜 あり。最終行「掉捍切妻戸……」の 切は 板と 訂するを 要す。

一一 真如蔵旧蔵本、毎半葉八行書写は 七行、第二時候門は時節門、六一五ペ 四行め 最後の 浄頭の 訓は シンチウに 訂すべし。六一六ペ 一〇行め「点画少異字の部は、五十八例で二例多く」とあるが、実は 五五例にて、一例 すくなし。

一二 春林本（上野図書館蔵室町末期写）六一七ペ 七行め、文久改元年九月 三園老人之記之 の「元・人」二字を 脱す。六一八ペ 九行め、「『梅干』以下」は「『梅干』に至る」と 訂すべし。十行め「又門中、鳥・虫類等の各部の初めに目注の肩書が加へられてをり、これ等は本書にのみ見られる所である」は、事実無根なれば 抹殺すべし。六一九ペ 六行めの 末文「その後になほ若干の語彙を有する」も 事実に あはず。

一四 図書寮本 六二〇ペ 一一行めの 末句は 皆共成仏道と 訂すべし。六二一ペ 四行め 洛中之条理の 注文は 横日条竪云里、弘仁九年被定 八町也 と 訂すべし。第五 官仁門（門名異る）とあるは まったくの 誤認なり。他本と ひとしく 官位門とあるを 直視すべし 第二 時候門・第六 聖仁名門は、目次には 他本と おなじく 時節門、人名門とあり。呉道士の 注文 画士は 画工と 訂すべし。第十 支体門 および 第十一 絹布門の 内部には 増補 おほきを、ことわらざるは 忠実ならず。

第二類本 三 文明十一年写本 六二九ペ 一行め、巳は 己、瀦は 淵、六三〇ペ 二行め、鯢は 鯢、二字 連記したる したの 霰は 雹、最終行 幃は 幛、六三一ペ 一行め 豚子は 豕子と それぞれ 訂すべし。一三行め 別筆かきいれ中 卵の まへに 印卵を 脱す。

五 天文十年写本（大屋徳城氏蔵）六三六ペ 三行め、神祇門の すゑ 倶生神の つぎに、他本では 人倫門の 巻頭に 存する 陛下・姑射山を をさめたるを ことわらず。六行め 人名門、「李夫

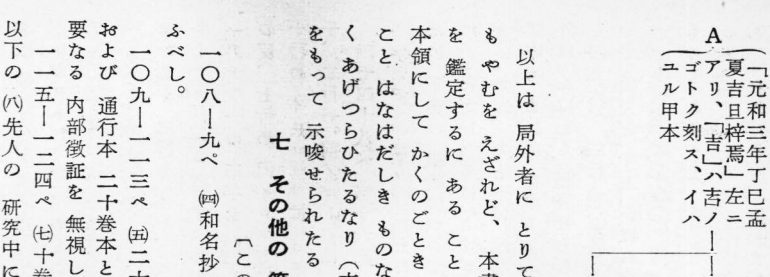
人の前に「烏」の語がある。これは他の凡ての伝本には見えないものである。」といはれたるが、他に みえざるも道理、こは王昭君の注文中 為画工毛延等所悪の「為」字が 本文に竄入したる ものを さらに 誤読したるなり。九行め 気形門 蜮蝛虫の 第二字は 蜮と 訂すべし。最終行 彩色門 鹿間 紲櫪は 鹿間 紲櫪、左爰は 辰、爰と二語に わくべし。麻蘭も 二語なり。六三七ペ 二行め、数量門 八宗・二宗を 存する むね とかれたるも、現に なし。五行め 畳字門 叡才は 叙才と あり。

六 天文二十三年写本(東大国語研究室蔵) 六三七ペ あとから三行め、五夏は 孟夏と 訂すべし。第一 天地門中 天分・地分のするに 増補 おほきが 特徴なるを、みおとしたり。「『洛中横竪小路』の題目を設けず」と あるが、現に 存す。六三八ペ 第七家屋門、第十 態芸門には それぞれ 増補 あるを、なき もののごとく いはれたるは 失考。

第三類本 一 大谷大学本 九行め「我師空公十七歳之御筆也」の御字を 脱す。六四三ペ 三行め、「孔子、老子」の まへに「魏曹操、蜀劉備、呉孫権」の 三語 あり。したがって 六四六ペ 一一二行めの 記事は 抹殺を 要す。六四四ペ 六行め、馬毛中 駮と雲雀毛との あひだに 雪踏を 有す。したがって 前行の 記述は いかが。

附、下学集の刊本 (イ)元和三年刊本附覆刻別本について、川瀬氏が 杉田良菴玄与開板本(刊年 みぎがはに あり、かつ、「吉」の字、ただしく 刻せるをもって 特徴とす)を 摺刷 わるきにも かかはらず 原刻本と みとめたるは 先入主に よりて 牽引せられたる ものに あらずや。実状を 直視せば、あらゆる 点において「元和三年丁巳孟夏吉旦梓焉」の 刊記のみ ひだりに ある 本(岡田希雄氏の いはゆる 甲本、亀田氏の いふ 一 初印本に あたり、「吉」字は 吉のごとく 刻しあり)よりも 数等 おとる ことを みとめうべし。そもそも 古刻本において 原刻・次刻の 別を さだむる 第一の 判別点は 摺刷面の 良否に ありて、開版者の識語の 有無には あらず(たとへば 節用集中、部門名陽刻の 初刻本および 三躰詩抄村上平楽寺版の 例を おもへ)。しかるにも かかはらず 川瀬氏が 後者を 覆刻別版と みとめたるは、すこぶる 没論理と いふべし。川瀬氏の 第二の 誤謬は 刊行年月のみ あるものを ただ 一種なるかのごとくに 誤認したる 点に あり。実は かかる 形態を もつ 本に 前記 初印本と みとむべき ものの ほかに なほ 二種 存するなり。一は 刊記が みぎに あるもの、この 種の ものは 往往 刊記 不備にして、「元和三年丁巳孟夏」「元和一」までを 刻せるもの等の ほかに まったく これをけづりさりたる ものも まま あり。この 種の 本は 杉田良菴玄与開板本の 後刻なれば 摺刷の それよりも わるき こと 勿論なるも、なほ 字形は くづれず 正を たもてり。しかるに、ここに 刊記 ひだりに 存する 本 ありて、原刻本と 形式 あひたるも、「吉」字は 吉のごとく 刻する 本 あり。この 本は 摺刷は 比較的 よろしきも、随所において 字様 くづれ、ほとんど 文字の 体を なさざるに いたれる ものも おほく みゆる 本にして、前記の 諸本と まづ おほきく 区別せらる。岡田氏の いはゆる 乙本 これなり。以上を 図示せば つぎの ごとく ならんか。

左の ごとくなれば 川瀬氏の 説は 論理に あはざる うへに、諸本を 精査せざるの うらみ ありと 評すべし。



以上は 局外者に とりては 蝸牛角上の あらそひと みらるるもやむを えざれど、本書の 本領の 一は 古書の 刊写の 先後を 鑑定するに ある こと すでに のべたるがごとくなり。その本領にして かくのごとき 失考を をかせるは 後人を あやまること はなはだしき ものなりと 思考するが ゆゑに ことごとしくあげつらひたるなり（本「下学集」について するどき 鑑識眼をもって 示唆せられたる 亀井孝氏に 感謝す）。

七　その他の 一節について

〔この 章も 文語文に したがふ〕

一〇八―九ぺ ㈣和名抄の 流布刊本の 一に 万治刊本を くはふべし。

一〇九―一一三ぺ ㈤二十巻本に 属する 高山寺本と 十巻本および 通行本 二十巻本との 比較は くはしきに にたるも、重要なる 内部徴証を 無視したるは 失考なり。

一一五―一二四ぺ ㈦十巻本と 二十巻本との 関係 一二五ぺ以下の ㈥先人の 研究中には 稲葉通邦（享和元年模刻本跋）や矢嶋三郎氏（国学第五輯 所収）の ものを くはふるが 学問的態度と いふべし。

一三三ぺ 棭斎の 業績を 賞揚する あまりに 先人の 校注を すべて「光を失ふもの」と かんがへたる 史観は 公正の ものとは おもはれず。いはんや 棭斎の 功罪についての 論を 一切 こころみざるにおいてをや。

一九八ぺ 文選読みについての 説は 他所と くらべて いちじるしく 簡略・粗漫なり。

二〇三ぺ あとから 八―七行めの 論は 没論理なり。

二八七ぺ 清水谷家旧蔵本名義抄の 撰者についての 推論は すこぶる 慎重を かきたり。二八六ぺ 同書引用文献中「記」を「古事記」と 解したるは 不可。

三一〇ぺ「レ」の 説は いかが。

三三五ぺ、三巻本色葉字類抄 畳字部の 語注に みえたる「部分」について「攷略」の 説を 駁したるも、しからば 終始一貫 ほとんど みだるる こと なき 整然たる 秩序を いかが 解すべき。

三五三ぺ 鎌倉時代初期写かと おもはれる 十巻本 伊呂波字類抄について 断簡 二葉のみを 論じ、大量 残存する 学習院大学本を 意識的に 調査の 要 なしとて しりぞけたる 態度は もっとも 非学問的なる ものとして しりぞくべし。

三六六ぺ 六行め、「漢字の 劃引字書類たる 字鏡集等」は 部首分類体と 訂すべし。

四四四ぺ 二―三行め、名語記の 発見、紹介を のべた 注文中「その後これによる」と あるは 文意 不明。なほ、辞書史上 特記すべき この本の 組織について とく ことは ほとんど なきは 失考。引用文についての あやまりは 以下のごとし。巻十、金沢実時の 識語中「重乞案立、三四五字之反音」と ある 乞は 令と 訂すべし なほ、案立の したの 読点は 不要。巻十 すゑの

翻字中 ミチとあるは 二ヶ所ともミナなり。四四五ペ 一行め マチ〳〵ナレドモの レは 原本 朱書傍記、九行め 散ゼザルモノ（「モノ」重複）も 同じ。原本は 前行末の モノに イヤカキと 傍書。同行 稲荷山ノ幽栖ノガレガタキ ユヘに、あとから 六―五行に かけて イ□ヲは マユヲと 訂すべし（以上 五ケ所、岡田氏は すべて ただし）。四四六ペ あとから 六行め、サ、カニトイフ。異名モアリ、の 句点、おなじく 二行め イキ、ヒキ也の 読点は いづれも 不要、同行 ネイリヌレバと 訂すべし。四四七ペ 一行め、「大炊」の つぎに「アリ炊」の 三字を 脱す。五行め、イハハムノ反は イリハムの反、七行め 但イロフトは 但イロコト。九行め サラは サテ、十行め イロココリは イロコアリ、あとから 三行め 干支は 支干、二行め 前ノゴトクは 前トノゴトクと 訂すべし。

四七四―八ペ 第十六節 平他字類抄、先行書（たとへば 日本漢字学史や おほくの 国語学史）は 通行本の 錯簡に 気づかざるため 下巻の 組織について 誤謬を をかしをるも、川瀬氏の 正にしたがひたるは さすがと いふべし。ただし、諸本 錯簡 おほきなかに、たとへば 図書寮の 一本や 黒川本の 一本のごとき善本も まれに 存する 事実に 言及せざりしは、自己の 所蔵本以外は くはしく 調査せられざりしにや。

四九六ペ 三行め、聚分韻略の 附訓刻本は 正保四年刊本をもって 嚆矢と すと いはれたるも、寛永拾九年刊本 および 慶長十七年刊本 にすでに 例 あり。あるいは さらに さかのぼるものも あるべし。

八四四ペ 六行め、伊呂波韻について 寛永ごろ刊本を ふるしとせられたるも、慶長まで さかのぼるを うべし。三六七ペ および 五四五ペ、頓要集について のちに（あるいは 他に）あたへたる 影響 ほとんど なしと いはれたるは 失考。

五四九―五五四ペ、第五節 琱玉集、延宝刊本も あり、書題は「瑯玉集」。

五五九ペ 五―六行め、節用集の 書名を もちゐざりし ものとして 和漢通用集・伊京集の 二を あげられたるが、なほ 辞林枝葉・増刊下学集の 二を くはふべし。また、塵芥を 節用集の 一類と みるも 可ならんと いはれたるが、同書は 電イナヒカリ雷イカツチをもって はじまるが ゆゑに、もし これを みとむるとせば、節用集に さらに 一類 たつるを 要す。「古本節用集の研究」を いかが よみたるにや。また、書を みずして 書を 論ずる ことの つみふかきを おもへ。

五七三―六ペ 第三節 要略字類抄、蔵書印は「写字臺之蔵書」なり。五七四ペ 二行め 熟語の 例に 蠟蜴（クワウヤク）イモジリを くはふべし。

五七五ペ あとから 三行めの 立言は 粗雑に すぐ。

八六八―八七七ペ 第十六節 通要古紙、引用に 誤植 おほきも、以下に 明白なる 誤認のみ 指摘するに とどむ。八六九ペ 太刀具分五十三は 堂段（タウセン）、あとから 四行め 猟具分六十三の 四民（カアミ）は 罠 一字に 訂すべし。馬病分 背瘡（クロセ）の 附訓は ヲコセ、牛毛分七十六の 鳥牛は 烏牛、牛体分七十七の 鰓（エムシ）の 附訓は コツノ（コツメ）、火打具は 火灯具（マイ）、八七一ペ 絵具分 燕支の 附訓は エム、（キ）、八七三ペ 木果類分百六十八 菓の 注 キノミは コノミ、名字分百七十二 義の 注 魚哥反は 魚奇反、吉の 注 居一反は 居一切、神祇部の 注 思魅は 鬼魅に それぞれ 訂すべし。なほ、祭祀分 紙銭の つぎに しるしある「シコガタ歟」は 原本に なし。あるいは 川瀬氏の 私注か。八七四ペ 仏具書は 仏具類、人倫部の 注 漁獲

は漁猟、工商類分　漆土は漆師、八七五ペ　乞盗類分　夜発はヤ甲（ホ）ッ、弁十四声法　随レ鼻（シタカウハナ）声の助詞へは　ハナニ　とそれぞれ訂すべし。

八八三―七ペ　第二十節　詞源略注、九〇七―一一ペ、第二十四節　和訓押韻は　それぞれ　あらたに　本書によって　紹介せらるるところのものなるが、前者には　同類書　詞源要略　ありて　宣賢卿字書、塵芥等と　ともに　清原宣賢の　辞書に　対する　関心のほどを　察知するを　うべし。また、後者には　憩斎急閑の　押韻ありて　つとに　著聞す。これらを　逸したるは　をしむべきなり。（以上、文語文）

八　むすび

綜合的に　判断するに、九五七ページの　大冊執筆の　労と　功とは　たかく　かはれねば　ならぬ。八十五種の　辞書に　関し、すくなくとも　七百種以上の　伝本を　目睹し、しかも　要所を　おさへるものを　よく　自己の　手中に　をさめえた　ことは　著者にしては　はじめて　なしうる　ところ、未曾有の　偉業を　うちたてた　といふも　過褒では　ない。

伴信友・狩谷棭斎・神谷克楨・黒河春村・橋本進吉博士等によって　つとに　ひらかれた　古辞書の　書誌研究は　本書によって　みごとに　集大成され　開花した。稲葉通邦・平田篤胤・木村正辞・岡井慎吾博士・岡田希雄氏ならびに　家父　孝雄によって　はじめられた　古辞書の　内容研究は　本書に　みられる　該博な　書誌的記述の　うらづけを　えて　長足の　進歩を　とげうるに　ちがひない。みぎの　意味において　辞書　ならびに　辞書史研究の　うへに　しめる　本書の　役わりは、その　微瑕にも　かかはらず　不動の　ものである　ことは　衆目の　みる　ところ、ただ　大冊の　権威の　もとに　うたがはず　引用する　ひとたちに　対し、わたくしは　わたくしなりの　たちばから「ことごとく　書を　信ずるは　書なきに　しかず」と　一般的に　注意したまでである（一体　このやうに　大小の　あやまりが　おほい　といふことは、個人の　能力の　限界を　しめすものか、それとも　個人の　心理・良心の　問題なのか、あるいは、また　書誌学の　もつ　根本的欠陥なのか　うたがはしく　おもふ）。なほ、本書において　研究文献や　複製事実に　対する　指示が　非常に　すくない　ことは　後進のために　親切とは　おもはれず、また、伝本の　所在について　つねに「きはめて（あるいは　比較的）まれで、……にしかない」といふごとき　否定的な　表現を　積極的に　する　傾向が　あるが、前項は　よしと　するも　後項は　すなほに「自分の　いままで　みたのは、……しかない、……に　すぎぬ」といふので　なければ　学術研究に　忠実なる　ゆゑんとは　決して　いへない。かたがた　をしまれる　記述態度である。

すでに　とくごとく、本書の　功績は、いままで　しられなかった　諸種の　伝本の　所在を　しめした　点、なかんづく　著者所蔵にかかる　重要な　新資料を　かず　おほく　引用　あるいは　紹介された　点にある。わたくしの　書評は　勿論　それらに　ふれる　ことができなかったために、叙上の　記述は　あるいは　均衡を　失してゐる　点が　あるかも　しれぬ。その意味において　本書の　真価のさだまるのは、川瀬氏が　ひめられた　新資料を　ひろく　学界に　公開されてからの　ことに　属する　ものと　かんがへられる。

おもふに　書誌学は　書私学　乃至は　書秘学では　なくして　勝義における　書示学で　なければ　ならぬ。その　窮極の　目標は、第一等の　資料の　価値宣揚　かつ　公開・流布に　ある　ものと　かんがふるが　ゆゑに　川瀬氏の　雅量　いやがうへにも　ゆたかならんことを　こひねがふ　こと　切。講談社　昭和三十年十一月発行　B5　九五七ペ　四五〇〇円

―日本大学教授―